

報告

2004年度徳島大学全学FD推進プログラムの実施報告

廣渡修一、曾田紘二、若泉誠一、森田秀芳、宮田政徳、川野卓二
(徳島大学大学開放実践センター)

1. はじめに

平成16年度は第1期全学FD推進プログラムの最終年に当たる。本年度は、前2年の反省点を踏まえて年次計画を立案し、大学教育委員会並びに各部局の支援を得て成功裏に実施することが出来た。以下では、各種プログラム毎に a. ねらい、b. 概要、c. 成果と課題を記述する。最後に、第1期の成果と課題、第2期の概要について略述することにしたい。

2. FD基礎プログラム

ここでは、企業等から採用、または助手からの昇任によって、新たに徳島大学で授業を担当されることになった教員を対象者として実施した、「FD基礎プログラム」について報告する。

a. ねらい

このプログラムは次の4点を目標に実施した。

- ・授業を計画し、実施し、評価する方法を体得する。
- ・授業研究の仕方を理解し、実践できるようにする。
- ・他大学(鳴門教育大学)から講師を迎え、FD活動に関しての大学間交流を図る。
- ・昨年度FD基礎プログラム参加者にモデル授業を発表してもらい、今年度参加者との交流を図る。

b. 概要

<開催期日>

2004年6月12日(土) 午前8時30分
徳島大学出発

2004年6月13日(日) 午後5時00分
徳島大学解散

<会場>

国立淡路青年の家

(兵庫県三原郡南淡町阿万塩屋 757-39)

<対象者>

企業等からの採用者及び助手からの昇任者。

参加者は以下の通りである。学部別に見ると、総合科学部9名、医学部6名、薬学部1名、工学部11名、合計27名である。

氏名	所属
菅原 仁	総合科学部
竹内 健児	総合科学部
蓮 沼 徹	総合科学部
真壁 和裕	総合科学部
山口 裕之	総合科学部
山本 雅昭	総合科学部
渡部 稔	総合科学部
西川 義晃	総合科学部
山城 考	総合科学部
二川 健	医学部
伊勢岡 義充	医学部
片岡 佳子	医学部
桑波田 雅士	医学部
福田 靖	医学部
松下 恭子	医学部
土屋 浩一郎	薬学部
石原 国彦	工学部
海江田 義也	工学部
小中 信典	工学部
田島 一人	工学部
芥川 正武	工学部
浮田 浩行	工学部
外輪 健一郎	工学部
得重 仁	工学部
平野 朋広	工学部
毛利 公美	工学部
四柳 浩之	工学部

<運営メンバー>

大学開放実践センター長その他、大学開放実践センター教員5名、医学部教員1名、計7名で運営した。

氏名	所属
廣渡修一	大学開放実践センター長
曾田紘二	大学開放実践センター
森田秀芳	大学開放実践センター
若泉誠一	大学開放実践センター
川野卓二	大学開放実践センター
宮田政徳	大学開放実践センター
竹内美恵子	医学部

<事務局>

氏名	職名
入江保男	教務課長
稲垣敏	教務課課長補佐
三好信幸	教務課教務係長
石井清貴	教務課専門職員

<内容>

2日間にわたって以下のプログラムを実施した。

<学外講師>

氏名	所属
石村雅雄	鳴門教育大学

第1日(2004年6月12日・土曜日)

9:30 国立淡路青年の家に到着・記念写真撮影

時刻	内容	講師・司会 (敬称略)	場所
9:30-10:00	・鍵の受け渡し、部屋の確認		特別第1研修室
10:00-10:30	(1)オリエンテーション ・徳島大学とFDへの期待、新任教官への期待 ・研修のねらいと意義 ・進め方とスタッフ紹介 (各先生5分程度)	副学長 共通教育センター長 開放実践センター長 (進行)曾田紘二	特別第1研修室
10:30-11:00	(2)アイスブレイキング	竹内美恵子	特別第1研修室
11:00-12:00	(3)はじめのWS「良い授業とは」 ・学生から見た良い授業・悪い授業 (学生アンケートの分析) ・発表	曾田紘二	特別第1研修室
12:00-13:00	昼食(12:15-12:40) 休憩		食堂
13:00-13:45	(4)講演 「個々の授業改善から改善の協働化、そしてFDへ」	石村雅雄先生 (鳴門教育大学)	特別第1研修室
13:45-15:00	(5)前年度基礎プログラム参加者による授業紹介 講義の仕方・話し方・展開の仕方(講義)	波場直之 佐藤高則 曾田紘二	特別第1研修室
15:00-16:00	(6)講義「授業の計画から準備まで」 ・シラバス作成の仕方、授業計画の立て方(講義) ・成績評価の仕方(講義)	宮田政徳 若泉誠一 川野卓二	特別第1研修室
16:00-16:25	徳島大学の教育理念とFD 15分発表、10分討議	大学教育委員会	特別第1研修室
16:25-16:40	コーヒープレイク		
16:40-17:40	(7)WS=「授業の計画と準備」 ・演習課題①(シラバスを作成する) ・演習課題②(授業計画を作る)	センター教員全員	第2~5研修室
17:40-18:10	・発表	センター教員全員	特別第1研修室
18:10-19:30	夕食 風呂他 (入浴時間 16:00~22:00)		食堂・浴室

19:30-20:00	(8)講義「効果的な教え方—実践的教授技術」 ・教材作成の仕方(講義)	若泉誠一 森田秀芳	特別第1研修室
20:00-21:00	(9)WS=演習「授業づくりと教材研究Ⅰ」 ・演習課題③(教材作成)	センター教員全員	第2~5研修室
21:00-22:00	交流会		特別第1研修室

22:00 消灯

第2日(2004年6月13日・日曜日)

時刻	内容	講師・司会	場所
7:10-7:20	朝の集い		つどいの広場
7:30-8:30	朝食(7:50-8:10) 掃除(8:30点検・退室)		食堂・宿泊室
8:30-11:00	(10)WS=演習「授業づくりと教材研究Ⅱ」 ・演習課題①~③の仕上げ	センター教員全員	第2~5研修室
11:00-11:30	徳島大学のこれからのFD活動の進め方と条件整備 15分発表、15分討議	大学教育委員会	特別第1研修室
11:30-12:00	「ミニ授業」発表会打ち合わせ	森田秀芳	特別第1研修室
12:00-13:00	昼食(12:40-13:00) 休憩		食堂
13:10-15:10	(11)演習「ミニ授業」発表会 [授業紹介(2分)+発表(15分)+コメント(3分) +討議・検討(10分)]×4G	森田秀芳	特別第1研修室
15:10-15:40	(12)プログラムのまとめ・これから ・学習したこと、得たこと、これからどう仕事に生かすか(2分×4G) ・修了証書授与 (13)アンケート (14)おわりの言葉	曾田紘二 副学長 大学教育委員会	特別第1研修室

16:00 バス発車 - 17:00 常三島キャンパス着

オリエンテーションに続いて、参加者相互の親和を目指して「アイスブレイキング」を行い、グループ内で自己紹介をし、ゲームをした。

はじめのワークショップでは「良い授業とは」というテーマのもとに、参加者が4つのグループに分かれ、あらかじめ用意した学生アンケート結果から、学生からみた「良い授業」、「悪い授業」をグループ毎に分析し、その結果をOHPシート2枚にまとめて、各グループ3分程度で発表した。

続いて鳴門教育大学の石村雅雄先生から、「個々の授業改善から改善の協働化、そしてFDへ」という題で講演していただいた。その中で石村先生は、教育改善活動の協働化、組織化の重要性を示された。

第1日目の午後から2日目の午前にかけて、参加者で構成された4つのグループが、それぞれ授業科目「恐

竜がわかる」、「観光と地域社会」、「死生学」、「身のまわりの環境学」を設定し、シラバスと講義計画書の作り方、成績評価の目的と方法、講義の進め方についてのミニレクチャーを受け、ワークショップを通じて、シラバス、講義計画書及び教材を作成し、2日目の午後、これらの作成物によって、グループ毎に15分間の模擬授業発表を行い、それに対する検討、討議を行った。

c. 成果と課題

プログラムの到達目標に対する達成度について

【到達目標：授業を計画し、実施し、評価する方法を体得する】

授業担当者は、授業という教育活動が「目標設定、目標実現のためのシラバスと教材の作成、授業実施、授業評価」から成る一連の流れによって構成されてい

ることを意識し、さらに、これらのことを実際に実施できる力をつけることが重要である。「FD基礎プログラム」は、講義とワークショップ及び模擬授業発表によってこの目標を達成しようとするものである。

今年度は、プログラムのこのような意義と目標が、これまでになく良く理解されていた。実施3年目なので、このプログラムが学内的にかなり認知されてきたと考えられる。しかし、一部には、実際に何が行われるのかあらかじめもっと情報を与えてほしいという声もあった。

会場については、今年度は全体発表のための部屋とともに、グループ数だけ研修室が確保できた。このため参加者はグループごとの準備をスムーズに行えた。また、プログラム全体の進行も支障なく行えた。グループワークにとって、グループごとに独立した部屋の確保は重要である。

参加者に対するアンケートを見ると、プログラムの個々の項目と内容が、テクニックに偏りすぎているという意見と、授業の計画、実施、成績評価の全体を知ることが出来て有意義だったという意見があった。この研修の基本コンセプトは「実践的FD」であるが、参加者の教育経験の長短及び関心やニーズの違いによって、このコンセプトに対する評価の違いがあると考えられる。

限られた時間と環境の中での作業であり、相変わらずプログラムがタイト過ぎるという意見があるが、授業準備から実施までの過程を実践的に経験するプログラムとして有意義だったと言える。

【到達目標 : 授業研究の仕方を理解し、実践できるようにする】

プログラムの最後に、各グループがワークショップを通じて作成した授業を発表し、その発表をめぐって授業研究会を行った。前年度、前々年度と同じく、授業研究会は次の手順で行った。

1. 授業発表グループのメンバーによる授業内容の紹介
2. 模擬授業の形で授業発表
3. 発表グループ以外のグループ代表(コメンテーター)によるコメント
4. 全体討議

ほとんどの参加者は、このプログラムによってはじめて「授業研究会」を経験したと考えられる。従って、授業研究会の手続きを知り、その手続きに従って実際に授業研究会を行ったことに意義がある。このような経験によってはじめて自分の授業を対象化し、意識化できるからである。

ここでの、模擬授業による授業研究会は、9月から12月にかけて実施される「FD応用プログラム」に引き継がれ、この応用プログラムでは、基礎プログラム参加者がカリキュラムの中で実際に行う授業について、授業検討会を行う。このような展開を通じて授業そのもののブラッシュアップを図るとともに、「授業研究」についての認識と実施方法を、一層確かなものとして身に付けることが出来る。

【到達目標 : 他大学から講師を迎え、FD活動に関しての大学間交流を図る】

鳴門教育大学の石村雅雄先生から「個々の授業改善から改善の協働化、そしてFDへ」という題で講演していただいた。

講演の中で石村先生は、個々の教員の授業改善から、活動の協働化、さらには学部、あるいは大学全体としての組織的なFDへと発展させることの重要性について話された。

鳴門教育大学は同じ徳島県内にありながら、これまであまり交流がない。今後、教育改善を中心に、一層の交流を図る必要がある。

【到達目標 : 昨年度FD基礎プログラム参加者にモデル授業を発表してもらい、今年度参加者との交流を図る】

このプログラムは、前年度までの参加者から出されていた「まずモデルとなる授業を見せてほしい」という要望に応えるものであった。

前年度のFD応用プログラムで収録した、波場直之先生の「相対性理論・時空と宇宙の科学」及び佐藤高則先生の「生物学(生命の科学I)」を選び、映像とともに、シラバス、授業計画書を示し、紹介した。良く工夫され、熱意の感じられる授業の映像とそのシラバス、授業計画書をプログラムのはじめに見ることによって、これが、模擬授業に向けての以後のグループワークの指針となり、非常に有意義だったと考えられる。

残念ながら、両先生とも出張等のため直接参加はできず、DVDによる映像紹介であったため、今年度参加者との直接の交流はできなかった。

計画から実施までの経過と改善について

ミニレクチャーとワークショップ及び授業発表などの実践の組み合わせはプログラムとして有意義だった。また、今年度も前年度に引き続き、授業作成資料として8テーマの雑誌を用意し、その中から各グループが一つずつ、計4テーマを選択した。

早くから準備に取りかかったので、プログラムの細部まで十分に詰めることができた。運営メンバーと事務局の連携を密に、早くから準備に取り組むことが重要である。

今年度はパソコン、液晶プロジェクター、OHP、スクリーン、コピー機等の機器及び文具を用意し、テーブルに整然と配置して、自由に使用できるようにした。必要なものを探し回るといったことがなくなり、スムーズに作業を進める上で有効であった。

模擬授業の教材作成のためにパソコンを使うことを、参加者に事前に周知しておく必要がある。教材作成のために、インターネットが使える環境にしてほしいという意見があったが、現在の会場ではLANケーブルの接続ができず、これは困難である。前年度と同じ会場であったが、食事、作業環境、自然環境など、今年度の参加者にはおおむね好評だった。

次年度のFD基礎プログラムに向けての課題

この点については二つのことが指摘できる。

一つは参加対象者を、例えば教育歴5年未満くらいの、教育歴の浅い教員にしぼることである。それによって、「実践的FD」のプログラム内容と参加者のニーズがより一致すると考えられる。

二つ目は、準備の日程上厳しい面があるが、逆に参加対象者のニーズをあらかじめ調査し、それをプログラムに取り込むことである。これもまた、プログラムと参加者のニーズをより近づけるために有効なことであり、両者が近づくことによって「FD基礎プログラム」が一層有意義なものになると考えられる。

3. FD リーダーワークショップ

a. ねらい

FD リーダーワークショップは、各部局における大学教育委員、FD 専門委員を対象に、FD リーダーとしての知識・技能の涵養と、新任教員等との交流による FD ネットワークの構築を狙いとして、第1期計画における重点施策の一つとして展開されているものである。

b. 概要

第1期全学 FD 推進プログラムの最終年にあたる本年度は、平成16年6月12(土) -13(日)の両日、国立淡路青年の家を会場に開催した。

参加者は副学長を含めて12名である。

今年度リーダーワークショップの参加者は、次の通りである。

番号	氏名	所属	職名	備考
1	川上博		副学長	
2	石田啓祐	総合科学部	教授	教務委員会委員長
3	桑原類史	総合科学部	教授	FD専門委員会委員
4	有澤孝吉	医学部	教授	教務委員会副委員長
5	羽地達次	歯学部	教授	教務委員会委員長
6	中條信義	歯学部	教授	FD専門委員会委員
7	福井裕行	薬学部	教授	FD専門委員会委員
8	山中英生	工学部	教授	教務委員会副委員長
9	田中均	工学部	教授	FD専門委員会委員
10	桑折範彦	全学共通教育センター	センター長	総合科学部
11	大恵俊一郎	高度情報化基盤センター	センター長	
12	金西計英	高度情報化基盤センター	助教授	FD専門委員会委員

ワークショップは、上記番号を奇数組と偶数組の2グループに分けて実施した。プログラム内容は次の通りである。

2004年度リーダーワークショップの目標と進め方

・目標

今年度のリーダーワークショップは、次の目標を達成することを課題としています。

- ① FD リーダーとして中期目標・中期計画に即して本学FDの理念を述べるができる。
- ② FD リーダー同士や新任教員との交流を図ることができる。
- ③ 新任教員に対しては、温かく、建設的な助言を行うことができる。
- ④ 第2期全学FD推進プログラムの柱立てを述べるができる。

・進め方

リーダーワークショップは、3つのセッションと全体会議とで構成されています。以下は、各セッションのテーマと進め方のモデルです。各グループで工夫を加えながら、楽しく、生産的で、有意義なセッションとなるようご協力ください。

第1 テーマ「徳島大学の教育理念とFD」

6月12日(土)

10:00-10:30 オリエンテーション

10:30-10:45 2004WSの進め方について提案と討議、グループ分けと役割分担

10:45-12:00 WS(リーディングと討議)

12:00-13:00 昼食・休憩

13:45-15:20 WS(続)

15:20-15:50 各班発表(5分ずつ)と討議

16:00-16:25 全体会議における発表(5分ずつ)と討議

準備資料:①徳島大学中期目標・中期計画より

②副学長論考(「国立大学法人化とFD」『徳大広報』NO.110、JAN 2003)

③2002年度リーダーワークショップの資料から

発表メディア:OHP シート

第2 テーマ「徳島大学のこれからのFD活動の進め

方」

16:40-17:00 レクチャー「アメリカの大学におけるFD」(川野卓二先生)

17:00-17:40 WS(リーディングと討議)

17:40-18:00 各班発表(5分ずつ)と討議

準備資料:①全国FD アンケート調査集計より

②岡山大学主催イベント資料

③アメリカの大学におけるFD

発表メディア:OHP シート

第3 テーマ「徳島大学のFD推進と条件整備」

19:30-20:30 WS(リーディングと討議)

21:00-22:00 交流会(懇親会)

6月13日(日)

7:10-7:20 朝の集い

7:30-8:30 朝食・掃除

9:00-9:50 WS(続)

9:50-10:20 各班発表(5分ずつ)と討議

11:00-11:30 全体会議における発表(5分ずつ)と討議

12:40-13:00 昼食・休憩

13:00-15:00 「ミニ授業」発表会

15:00-15:30 まとめ・アンケート等

準備資料:①全国FDアンケート調査集計より

②その他

発表メディア:OHP シート

c. 成果と課題

今年度のプログラム策定に当たっては、昨年度の事後アンケートの結果を踏まえつつ、①新任教員との交流を図る、②過密を避け、ゆとりのあるプログラムとする、の2点を念頭に置いた。

テーマは当初3つを予定していたが、時間進行その他の事情により、第2・第3テーマについては合体してワークショップを進めた。リーディング資料については、FD全国調査や米国関連資料といった新しいデータを盛り込み、同時に種類を厳選して縮約したこと、プログラム中に大学開放実践センター川野助教授の米国

報告を入れたこと、ワークショップの結果はリーダー会のみならず、全体討議の場においても発表の機会をもつようにしたこと等により、昨年度よりゆとりの中で内容の濃いプログラムが展開された。

事後アンケートの結果をみると、おおむね成功裡に終了したように思われる。前年度の反省点を踏まえて、時間的なゆとりと内容の精選、交流活動の比重の増加等々に工夫を加えたことがその要因となったように思

われる。

次年度以降は第2期計画となるが、第1期の反省点を踏まえて、更に参加者の得心の行く内容・方法を開発する必要がある。それと共に、参加者のマンネリ化を打破する試みも必要となろう。

なお、本プログラムの運営は、大学開放実践センター廣渡、高度情報化基盤センター金西が担当した。

2004 FDリーダーワークショップ(2004・6・12-13) アンケート結果

(1) 今回のFD プログラムの内容について

- ①全体的に良かった。これぐらいの量が適当。
- ②少しテーマが大きすぎたと思うが、一方、全体的な流れはつかめた。テーマ内容からして資料提供に続いて直ちに議論する方向のような合宿形式は有効なのか少し疑問のあるところと思う。
- ③現在の必要なテーマでタイムリーだ。
- ④大きな課題で議論するのに論点がずれた。
- ⑤良いと思います。⇒話されたことをどう実現に向けるかが問題でしょう。⇒考え
- ⑥良い。第1期3ヵ年の最終年でもあり、次期活動に向けた1期の反省と更なる展望施策を考えることは実際のテーマ、内容であった。
- ⑦テーマが抽象的(大きすぎる)と感じます。テーマ設定の意図背景等の説明があると議論しやすいのでは?
- ⑧全体的な内容は良かったと思います。このような活動を継続することにより、大学全体の教育システムが良くなっていくものと思います。話は少しずれますが、教育改革の方向が米国のもの後追いをしているような印象を持ちました。米国の良い点を取り入れながら日本の現状にあった改革がなされていくことを望みます。
- ⑨全体的には良いと思いますが、最も基本的な問題は「いかに学生のやる気を引き出すか」であります。この問題を重点的に検討する必要があります。それと社会人としてのマナー(しつけ)をつける方法も検討するべきだと思います。
- ⑩今後のFDの進め方についての議論は有益であったと思う(資料の提供もあり討論をやりやすかった)。
- ⑪全体発表の後の討論時間としかけが足りないようでした。ワークショップ的に個人の意見を出させる工夫が欲しい。内容的には良いと思います。但し、リーダーと初任者の組み合わせについてはギャップを感じました。リーダー側には「望まれる大学教員像」とかの

メッセージ・テーマがあっても良いかもしれません。最初に参加者の会への参加目的を語らせる、「かかせる」、公開するしかけが必要ですね。(注:ミニ授業も含めての意見)

(2) 今回のプログラムの運営について

- ①スムーズだった。
- ②昨年に比べ時間的に少しゆとりがあり、単にプログラムにしたがって与えられたテーマを議論するだけでなく、日頃自分なりに疑問、考えていた事項、他学部との状況を個別に話が出来た余裕が出来てよかった。
- ③たいへんスムーズな運営でよしいと思う。
- ④時間通りいかなかった。いつものことながら時間がタイトであった。
- ⑤リーダーの人も新しい人と交流したい⇒夜のみでは少ない。総科はなかなか人と名前が一致しないこの研修でなく、別の機会が必要。
- ⑥各プログラムの時間は結果からみると適切であった。検討事項は多岐にわたるので、密度は高い。第2・第3課題は一つにまとめられた。これは内容的にも、作業時間からも効率的であった。
- ⑦昨年と比較してWSの時間に余裕があり、種々の経験に基づく具体的な意見の交換が有意義であった。
- ⑧資料を読む時間が足りなかったので事前に配っていただいても良かったかと思います。FDに無関心な人(食わずぎらいの人)をいかに減らしていくかが今後大切になるのではないのでしょうか。
- ⑨良いと思います。
- ⑩ゆとりがあり昨年よりも良かったと思います。
- ⑪全体としてスムーズですばらしい運営でした。第1研修室は常にグループ形式にした方が良かったかもしれません。質問や討議をグループでする、代表者が発表する、講演者が答える、という形式をスムーズに出来るようにした方が良いと思います。「振り返り」の時間はもっととるほうがいいです。全員が感想を述べ、当

初の参加目的の達成度について自己評価する程度の時間をとるべきです。これは定着化にとっても非常に重要なプロセスと思います。

(3) 今回のプログラムの会場について

- ①食事は良かった。ベッドにやや問題あり。
- ②地理的にも近く、海に面して良好な自然の中で、他のさまざまな団体とのふれあいも出来て会場としては良いと思う。しかし、合宿研修のための様々な準備、会場設営等、担当者の負担は多大と思う。
- ③寝る部屋が4-6 ベッドのタコ部屋でいつもながら閉口させられる。
- ④良かった。
- ⑤こんなものでしょう。相応では、参加者が費用負担するので余り高額では大変ではないか。
- ⑥大学からも近く、経済面でも程々と考えます。もちろん、他団体と活動が重ならない会場があれば良いが、他の環境は良好と考える。毎回のことであるが、入浴・食事の時間に余裕が欲しい。朝の海岸散策は快適。
- ⑦適当であった。
- ⑧食事もおいしく、まわりの環境も良かったと思います。
- ⑨問題はないと思います。
- ⑩会場も良好と思います。
- ⑪思ったよりは「問題なし」でした。

(4) 今回のプログラムの全体的な印象について

- ①スムーズだった。他学部の人と親しくなるという別の効果もあると感じられる。
- ②基礎プログラム参加者数を増やす(減らさない)、学生アンケート等資料を加えるとよりよかったと思う。
- ③内容、運営ともに本音が出る良い雰囲気になった。より具体的に実行すべき内容が続出することを望む。

4. FD 推進ハンドブック作成ワークショップ

a. ねらい

FD 推進ハンドブック作成ワークショップは、次の3点を到達目標として、平成16年9月24日(金)9:30~17:00、大学開放実践センター第1講義室を会場にして開催された。

- ・徳島大学FD活動の理念と方法について理解し、推進する方向を示す。
- ・授業エキスパート相互の情報交換及びFDに対する共通理解を深める。
- ・「徳島大学FD推進ハンドブック」を作成する。

④新人(?)のプログラムとの交流が少なかったように思う。部屋割りに工夫が必要。基礎プログラムとリーダープログラムを交ぜても良い。

⑤スタッフの方々に感謝。

⑥初めての参加であったが、基礎プログラムとの連携は内容・交流面で考慮されているといえる。FD運営・企画に関する良い体験勉強になりました。お世話になりました。

⑦事前に資料を配布し、当日の議論がより深まるような方法をとったらどうでしょうか?

⑧有意義なプログラムだったと思います。各班でまとめた報告の内容は何らかの形でfeed back していただきたいと思います(報告書or ホームページへの掲載等によって)。他の参加者の方が大変よく勉強されているので、自分ももっと勉強しなければと思いました。

⑨(1)の内容をプログラムに入れて欲しいと思います。

⑩色々の意見が聞くことが可能であったし、他学部の教員との交流も出来て好印象であった。

⑪80点の合格と思います。*ミニ授業の「気づいた点の記述リーダーチャート」のシート、グループ分枚数は欲しいです。全員コメントを書いて出したほうがよいです。ミニ授業のテーマに「数学・微分積分」や「化学」など、Basic理系を入れたほうがコンテンツの興味でない点での評価が中心になると思います。

以上、本年度FDリーダーワークショップについて略述した。

b. 概要

ワークショップでは、センター教員による「徳島大学FD推進ハンドブック」制作推進チームが作成した原案、「徳島大学FD推進ハンドブック」(第3号 第9巻~第11巻)を下敷きにして、各部局から選出されたFDリーダーを3つの制作グループに分け、内容・構成等の検討を行った。

なお、これまで2回のハンドブック制作経験があったとはいえ、ワークショップに提案する原案の作成までには、大変な労力と時間が必要であった。

ワークショップと各巻の制作メンバー

(○印：責任執筆者)

「第9巻 レポート作成指導ハンドブック」作成ワークショップ

○曾田紘二(大学開放実践センター)、樫田美雄(総合科学部)、杉山茂(工学部)、野村昌弘(医学部・歯学部附属病院)、北研二(高度情報化基盤センター)、山本真由美(全学共通教育センター・総合科学部)

「第10巻 TAの活用ハンドブック」作成ワークショップ

○川野卓二(大学開放実践センター)、中山慎一(総合科学部)、新家利一(大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)、松尾敬志(大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)、土屋浩一郎(大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)、長町重昭(工学部)、齊藤隆仁(総合科学部)、佐野雅彦(高度情報化基盤センター)

「第11巻 授業改善のための事例集ハンドブック」作成ワークショップ

○森田秀芳(大学開放実践センター)、若泉誠一(大学開放実践センター)、宮田政徳(大学開放実践センター)、桂修治(総合科学部)、森健治(大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)、中條信義(大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)、樋口富彦(大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)、原口雅宣(工学部)、大橋眞(全学共通教育センター・総合科学部)、松浦健二(高度情報化基盤センター)

c. 成果と課題

各ワークショップでは活発な意見交換があり、程度の差はあるものの各ハンドブックのイメージはより鮮明化した。

ワークショップ開催後、作業部会による数次の検討会を経て、平成17年1月に第3号を刊行、直ちに全学の教員に配布した。

第11巻はこれまでのハンドブックと異なり、実際の授業風景を撮影したビデオを編集し、ミニビデオ化(CD-ROM)し、優れた授業の実例を示した。このミニビデオの規格はMPEG1になっているが、これはアップルコンピュータ社製のパソコン(Macintosh)に「MPEG2再生コンポーネント(有償)」がインストールされていない場合、MPEG2規格のビデオの再生ができないことによる。

ハンドブック作成の編集作業では、様々な意見を集約しつつ内容を修正するため、原案の作成と同様に多くの時間と労力を要した。今後のハンドブック作成に当たっては、テーマ設定の仕方の見直し、作業量全般の合理化と見直し、WEBへの掲載などが挙げられる。

また、昨年度も述べられているが、これまで刊行されたハンドブックがどの程度活用されているのかを調査し、本事業自体の自己点検・評価をする必要がある。

FD推進ハンドブック作成ワークショップ日程表

平成16年9月24日(金)プログラム

時刻	内 容	分 担
9:30~10:30	(1)オリエンテーション ・自己紹介と今日のプログラム ・ワークショップのねらいと意義・進め方 ・スタッフ紹介 (2)グループワーク作業分担と概略説明 ①「レポート作成指導」ハンドブック ②「TAの活用」ハンドブック	(1) 進行=廣渡 (2) 曾田・森田 若泉・宮田 川野

	③「授業改善のための実例集」ハンドブック	
10:30~12:00	(3)WS=課題作業の推進=検討	(3) 曾田・森田 若泉・宮田 川野
12:00~13:00	昼食	
13:00~15:00	(4)WS=課題作業の推進=検討と入力	(4) 曾田・森田 若泉・宮田 川野
15:00~15:20	休憩	
15:20~16:30	(5)WS=課題作業の推進=出力・点検・印刷	(5) 曾田・森田 若泉・宮田 川野
16:30~17:00	(6)WS=「課題作業成果の発表と検討 ①「レポート作成指導」ハンドブック ②「TAの活用」ハンドブック ③「授業改善のための実例集」ハンドブック (7)おわりの言葉	(6) 進行=廣渡 (7) 廣渡

5. FD応用プログラム(授業研究会)

6月に「淡路青年の家」で新任教官を対象に実施したFD基礎プログラムの成果を、新任教官がどのように自分の授業に実際に適用したか、その結果を発表・検討するのがこのFD応用プログラム、いわゆる授業研究会である。本年度はスケジュールを調整した結果、過去最多の常三島キャンパスで8回、蔵本キャンパスで2回開催した。

a. ねらい

このFD応用プログラムの到達目標は次の4つである。

1. 授業の検討を行い、その良い点を学び合う。
2. 学習者中心の授業とは何かを理解する。
3. 授業改善のポイントを指摘する。
4. 授業研究の進め方を体得する。

b. 概要

本年度のFD応用プログラム、即ち授業研究会の実施回数、日時、場所、司会者、プログラム内容である対象者と授業科目名は以下の通りである。

1. 第1回(工学部関連)

日時：2004年9月15日(水)

13:30-16:40

場所：大学開放実践センター第二講義室

司会：曾田紘二(開放実践センター)

プログラム内容：

- ① 13:30-14:30

石原国彦 「機械工学概論」

- ② 14:35-15:35

四柳浩之 「離散数学」

- ③ 15:40-16:40

田島一人 「量子エレクトロニクス」

2. 第2回(工学部関連)

日時：2004年9月30日(木)

13:30-16:40

場所：大学開放実践センター第二講義室

司会：宮田政徳(開放実践センター)

プログラム内容：

- ① 13:30-14:30

外輪健一郎 「無機工業化学」

- ② 14:35-15:35

小中信典 「集積回路特論」

- ③ 15:40-16:40

- 海江田義也 「機械工学概論」
3. 第3回(総合科学部関連)
日時: 2004年11月11日(木)
13:30-16:40
場所: 大学開放実践センター第二講義室
司会: 若泉誠一(開放実践センター)
プログラム内容:
① 13:30-14:30
菅原 仁「物性科学ⅠⅠ」
② 14:35-15:35
渡部 稔 「分子生物学」
③ 15:40-16:40
山城 考 「系統分類学Ⅰ」
4. 第4回(総合科学部関連)
日時: 2004年11月19日(金)
13:30-16:40
場所: 大学開放実践センター第二講義室
司会: 森田秀芳(開放実践センター)
プログラム内容:
① 13:30-14:30
真壁和裕 「発生物学」
② 14:35-15:35
蓮沼 徹 「基礎数学(微分積分学ⅠⅠ)」
③ 15:40-16:40
西川義晃「法律学(身のまわりの法律問題)」
5. 第5回(総合科学部関連)
日時: 2004年11月25日(木)
14:30-16:35
場所: 大学開放実践センター第二講義室
司会: 曾田紘二(開放実践センター)
プログラム内容:
① 14:30-15:30
山口裕之 「ヨーロッパ思想研究」
② 15:35-16:35
竹内健児 「心理学初歩」
6. 第6回(工学部関連)
日時: 2004年11月30日(火)
13:30-15:35
場所: 大学開放実践センター第一講義室
司会: 森田秀芳(開放実践センター)
プログラム内容:
① 13:30-14:30

- 平野朋広 「分子設計化学」
② 14:35-15:35
浮田浩行 「C言語演習」
7. 第7回(総合科学部と工学部関連)
日時: 2004年12月15日(水)
13:30-15:35
場所: 大学開放実践センター第一講義室
司会: 川野卓二(開放実践センター)
プログラム内容:
① 13:30-14:30
山本雅昭 「刑事訴訟法」
② 14:35-15:35
芥川正武 「計測Ⅰ」
8. 第8回(薬学部と医学部保健学科関連)
日時: 2004年12月21日(火)
13:30-15:35
場所: 医学部保健学科第1会議室
司会: 若泉誠一(大学開放実践センター)
プログラム内容:
① 13:30-14:30
土屋浩一郎 「医療薬学Ⅱ」
② 14:35-15:35
松下 恭子 「在宅看護論」
9. 第9回(医学部栄養学科関連)
日時: 2004年12月22日(水)
14:30-15:30
場所: 医学部栄養学科棟207号室(2F)
司会: 宮田政徳(大学開放実践センター)
プログラム内容:
① 14:30-15:30
伊勢岡義充 「給食運営管理論」
10. 第10回(医学部栄養学科関連)
日時: 2005年2月15日(火)
13:30-14:30
場所: 大学開放実践センター第二講義室
司会: 宮田政徳(大学開放実践センター)
プログラム内容:
① 14:30-15:30
二川 健 「人体構造機能学」

実施方法は次の通りである。

授業研究会対象者の授業をFDワーキンググループのメンバーがデジタルビデオで撮影し、(今年は対象者が多かったので一部の対象者には自分で撮影するよう依頼した)そのDVテープをパソコンを使ってMPEG IIに画像変換しDVDディスクを作成した。そのDVDディスクを授業を実施した対象者に渡して、授業研究会用に編集するよう依頼した。

①司会者は前もって発表者(=対象者)から提出された、授業研究会用資料(シラバス、授業計画書、当日の配付資料)を参加者に配布する。②発表者は、撮影された自分の授業がシラバスのどこに位置し、当日の授業目標が何であったのかを述べる。(約5分)

③発表者は撮影された授業の授業風景を前述のDVDディスクを使ってパソコン上で、ポイントを押さえながら(即ち、授業の始まりと終わり、新しい内容に入った所、学生への問いかけ・やりとりが見られる所、板書の場面等)20~30分上映する。(20~30分)

④発表者が上映した自分の授業を見て、授業の反省点を述べる。(約5分)

⑤授業研究会に出席した他の参加者が質問や意見を述べ、発表者と討議する。主な討議ポイントは、授業の組み立てと構成について、授業での話し方、授業教材の適切さ、事業の時間配分、教員と学生との交流などである。(20~30分)

c. 成果と課題

6月のFD基礎プログラム参加者27名中、今年度のFD応用プログラム発表者は、授業担当予定がなかった5名を除いた22名であった。昨年度は基礎プログラム参加者18名中14名、一昨年度は基礎プログラム参加者22名中10名であったので、今年度は第一期全学FD推進プログラムの3年間中で過去最多となった。毎年辞退者が減り参加者が増えていったのは、この応用プログラムが学内的に認知され、その成果が徐々に現れて来ているからではないかと考えられる。その成果を分析してみると、次のような三点が挙げられるだろう。

①発表者がく自分の授業をビデオで撮られる>

ことに関しては、最初は恥ずかしがって嫌がる教員もいたが、撮影された自分の映像を実際客観的に見て、自分の姿はこうだったのか、と驚いた教員が多かった。特に自分の話し方の癖などに気付いた発表者が多く、「自分はこんなに早口でしゃべっているとは思わなかった」というような声が聞かれた。

②発表者がく授業のシラバス、授業計画書、配付資料を準備する>ことに関しては、「優れた授業は周到な準備なしではありえない。」という名言を裏付けることにもなっている。つまり、分かり易い良い授業を行っている教員は、周到なシラバスを作り、綿密な授業計画を立て、適切な配付資料を準備しているのが授業研究会での資料で分かる。

③発表者がく他の参加者から問題点を指摘される>ことに関しては、発表者は自分では分からない問題点を第3者である他の参加者から指摘されることによって気付き、また参加者も同じような問題点を自分の問題としてとらえることができる。そして両者がそれらの問題をどのように解決したらよいかについてお互いに意見を出し合う。

昨年度のFD実施報告書で示された課題の中で、FD応用プログラムを質的に向上させるための4つの提案に関して、2つは実現され、2つは残されたと思われる。

実現されたものはく授業研究会の内容の充実>とく「良い授業の法則性」を明らかにして行く活動>である。授業研究会の内容の充実は、大学開放実践センターのFDワーキンググループのメンバーが司会を担当し、事前に発表者と内容・機材などについて綿密な打ち合わせを行い、司会者は自分が担当する発表者の90分の授業を予めビデオで確認して授業研究会に臨んだ。その準備のお陰で、授業研究会当日の20~30分の授業風景上映では分からないような所を十分フォローすることが出来、突っ込んだ質問に対しても対応できたと思われる。次の、「良い授業の法則性」を明らかにして行く活動は、「良い授業の法則性」を、何らかの形でまとめることが必要である、という提言であった。このことに関しては、

期せずして今年度のFD推進ハンドブック第3号の第11巻「授業改善のための実例集」が刊行されて、今までの3年間の授業研究会の蓄積の中から「良い授業」の見本を幾つかの授業タイプ別に探し出すことが出来た。今までのFD応用プログラムが全く無駄ではなかったことが証明されたと言える。

残念ながら実現出来なかったものは、<FD応用プログラム参加者が増えるような仕組みを考えること>と<大学内の授業研究ネットワーク作り>である。授業研究会への参加者が少なかったことは最も残念なことであった。一応、基礎プログラム参加者とリーダーワークショップ参加者(いわゆる授業エキスパート)に参加を呼びかけたが、参加したのは授業研究会の発表者と大学開放実践センターのFDワーキンググループのメンバーが中心であった。特に教育歴が長い、授業エキスパートの教員からは有益な授業改善のポイントを新任の若い教員に対して指摘して頂きたかった。また授業研究会で2人または3人連続して発表した時、折角授業研究会で発表しても自分の発表が終わると退席する参加者が見られた。他の発表者の授業の優れた点を学ぶ機会を失っているように思えて残念だった。次の、大学内の授業研究ネットワーク作りに関しては、新任教官が抱える悩みや問題を解決するための支援ネットワークを築くことを目指していたが、残念ながら、第一期ではそこまでは実現できなかった。そこで是非とも次年度からの第二期全学FD推進プログラムでは、新規プログラムの「個別コンサルテーション」と「FDラウンドテーブル」を行うことで支援ネットワークの構築を実現したいと願っている。

6. FD シンポジウム

() 常三島会場「学生参画型及び教育改善の可能性」

a. ねらい

2002年度に始まった本学のFD推進プログラムも今年度で第1期の最終年を迎えた。これまで、

教員を中心にしたプログラムを実施してきたが、今年度は、学生を巻き込んだFD活動を展開している岡山大学と愛媛大学の事例発表を交えたシンポジウムを開催した。本学からは、共通教育・学部開放科目で学生が自ら展開する授業である「技術の歴史」に関する報告が行われ、新しい視点から教育改善の可能性を探るための議論を行った。

b. 概要

平成16年1月19日(水)13:30-16:00、工業会館メモリアルホールにて開催した。

プログラムでは、岡山大学で行われている学生と教職員による教育改善委員会の活動、愛媛大学の特色ある教育支援プログラム、徳島大学の学生参画型授業の事例報告、及び全体討議を行った。

岡山大学では、平成13年に学生・教員FD検討会がスタートし、平成16年から、学生・教職員教育改善委員会に進化・発展する形になっている。学生と教職員が、大学教育のあるべき姿について恒常的・積極的に対話を重ね、教育改革に学生の視点を注入しようとしている。

愛媛大学では、学生参画による大学教育支援プログラムを実施している。スチューデント・キャンパス・ボランティアという活動を通じて、学生同士による学習支援、生活支援、障害学生支援、留学生支援などの活動が行われている。

本学からの報告は、工学部で行われている「ルーツを探れ」と呼ばれる学生参画型授業であった。この授業は、学生自らが学習する内容を設定し、調査を行い、まとめ、発表するというものである。学生主体という今までにないスタイルで授業が進められ、学生の能動的な学習が15週間に渡って展開された。

当日の流れは次の表に見るとおりである。

なお、シンポジウムの後、「FD推進ハンドブック」第3号の説明を行った。

13:30-13:35	開会(総合司会:大学開放実践センター教授 曾田紘二)
13:35-13:40	開会の言葉 青野敏博 学長
13:40-15:40	事例発表 岡山大学における学生参画型教育改善活動 橋本勝教授と滝本大輔氏(教育学部3年生) 愛媛大学における学生参画型教育と特色ある教育支援プログラム 奥居正樹助教授と宗田将臣氏(法文学部3年生) 徳島大学における学生参画型教育 英崇夫教授と山中健二氏(工学研究科M1年生)
15:40-15:45	休憩
15:45-15:55	徳島大学FD推進ハンドブック紹介 紹介者 大学開放実践センター 川野卓二助教授
15:55-16:00	まとめ・閉会の言葉 川上博 副学長(教育担当)

c. 成果と課題

今年度のプログラム内容は、全学共通教育センターと打ち合わせ設定した。

本学でも、岡山大学や愛媛大学の先例に倣って「教育の質を向上させるための学生ワーキンググループ」が組織され、機能しようとしている時期であり、今回のシンポジウム開催はまさしく適期であったと言える。また、今回のシンポジウムに学生の参加があったことも成果の一つと考えられる。今回のように高等教育の当事者である学生を巻き込んだFD活動が定例化する方策を確立する必要がある。

例年と同様、参加者が少なかったことが今後の課題である(参加者48名)。学期末に近く、集客が難しい時期であるが、それ以上に、自由参加であることの限界の方が大きいように思える。参加に対するインセンティブを工夫する必要があるが、FDに対する自己啓発ニーズの掘り起こしにつながる方策開発も今後の課題となる。

() 蔵本会場「6年一貫教育の現状と課題：統合医療教育への道筋」

a. ねらい

2004年度より大学院ヘルスバイオサイエンス研究部が発足し、蔵本地区の研究活動における専門領域を超えた取り組みが開始された。教育面においても、医・歯に続いて薬においても平成18

年度より6年制が導入され、4年制との並立が決定された。

こうした状況の中で、平成15年度より統合医療教育開発センターが発足し、「人間愛に溢れる医療人」の育成に向けた活動が開始された。今年度FDシンポジウムは、このような従前の縦割りの壁を限りなく低くしたクロスオーバーの取り組みの意義や将来像を現時点で問うことにより、蔵本地区の教育面における実践活動の検証を図ることをねらいとした。

b. 概要

平成16年1月26日(水)14:00-16:00、青藍講堂にて開催した。

プログラムは、前半に各部局より「6年一貫教育への取り組み：現状と課題」と題して沿革と現状、並びに現時点における課題について報告を受けた。

続いて後半では、「6年一貫教育への取り組み：統合医療教育への道筋」と題して、前半の登壇者をシンポジストに迎え、統合医療教育開発センター長の玉置教授を司会者にして実施した。

当日の流れは次の表に見るとおりである。

なお、シンポジウムの後、「FD推進ハンドブック」第3号の説明を行った。

14:00-14:05	開会(総合司会:大学開放実践センター長 廣渡修一)
14:05-14:10	開会の言葉 全学共通教育センター長 桑折範彦教授
14:10-15:55	各部局報告「6年一貫教育への取り組み:現状と課題」 医学部 佐野壽昭教授 歯学部 羽地達次教授 薬学部 滝口祥令教授
14:55-15:00	休憩
15:00-15:45	シンポジウム「6年一貫教育への取り組み:統合医療教育への道筋」 シンポジスト 医学部 佐野壽昭教授 歯学部 羽地達次教授 薬学部 滝口祥令教授 司会 統合医療教育開発センター長 玉置俊晃教授
15:45-15:55	徳島大学FD推進ハンドブック紹介 紹介者 大学開放実践センター 森田秀芳教授
15:55-16:00	まとめ・閉会の言葉 全学共通教育センター長 桑折範彦教授

c. 成果と課題

今年度のプログラム内容は、統合医療教育開発センターとの綿密な打ち合わせの上に設定したものである。その意味で、従前のような企画側(大学開放実践センター)の<独走>を排した地点で立案されたものということができる。テーマ自体、まさしく時宜にかなったものであった。

ただ、シンポジウムの事前打ち合わせの席上でも問題になったのであるが、このテーマに対する各部局の対応には温度差があり、全部局にとって適切なテーマ設定であったかどうかについては疑問なしとしない。であるとはいえ、そうした現実の問題や矛盾は、むしろ率直に提示することにより、蔵本地区のこのテーマに関する現況をありのままに浮かび上がらせることの方が重要であるということ、今回のシンポジウムは、問題提起型のものであり、それなりの意義があるということなどを共通理解として本番に臨んだ。

本番では、現況報告の後に、<将来像>や取り組みの可否等について論議を深めたが、予測どおり、部局による対応の違いや微かなズレが浮き彫りとなった。しかし、会場との議論の中も含めて、本テーマの意義(問題性)に関する認識は大いに深まったものと思われる。

課題としては、例年と同様、参加者が少なかつ

たことが挙げられる(参加者35名)。学期末に近い、週日の午後の時間帯は、元々集客には不適當と思われるが、それ以上に、自由参加であることの限界の方が大きいように見える。参加を強制することの負の側面も考慮する必要があるが、今後は、折角の熱心な討議を更に大きな輪にする努力が必須である。登壇者のご尽力に報いる手立てを講じたいものである。

なお、FDシンポジウムは、第1期計画の年次プログラムの総まとめとして企画されたものであるが、来年度より開始する第2期計画においては、シンポジウムの形式は廃して、FDカンファレンスとして再出発する予定である。

7. 第1期計画の成果と課題・第2期計画の概要

「全学FD推進プログラム第2期計画(2005/4-2008/3)」については、12月15日開催の大学教育委員会において了承された。以下に第1期プログラムのまとめと第2期計画の概要を示す。

徳島大学 全学FD推進プログラム 第2期(2005/4-2008/3)計画について

はじめに

本年度は、平成14年度に開始した全学FD推進プログラム(第1期)の最終年度にあたる。これまで実施してきたFD推進プログラムを総括し、来期に向けた計画策定を行った。

・第1期全学FD推進プログラムのまとめ

第1期プログラムの目的

- ①理念にとどまらず実践的な授業改善活動を行う。
- ②FD活動に、体系的・組織性をもたせ、全学FDと学部FDの相乗効果を目指す。
- ③参加教員が将来のFD活動の中核的なメンバーとして育つことを期待する。

実施したプログラム(参加人数計)

○FD基礎プログラム

新任教員(20~30名程度)を対象とし、1泊2日の日程でワークショップと全体討議を行い、徳島大学FD活動の理念、シラバス作成、講義計画、教授技術等について、演習、発表、研究討議を行った。(H14~16年計68名)

○FDリーダーワークショップ

各部署のベテラン教員を糾合し、全学的見地から本学におけるFDの理念と課題について探求する。実施は、基礎プログラムと並行して合宿研修として行った。(H15~16年計24名)

○授業エキスパート・ワークショップ

各学部及び全学共通教育センターから推薦された授業エキスパート教員と大学開放実践センター教員によって「徳島大学FD推進ハンドブッ

ク」を開発した。(H14~16年計62名)

○FD応用プログラム

FD基礎プログラムを受講した教員を対象として授業研究会を行い、基礎プログラムで習得した内容を実践的に高め、展開力と研究討議の方法を学んだ。(H14~15年計58名)

○FDシンポジウム

常三島キャンパス、蔵本キャンパスの2会場に分けて、当該年度に実施された学部FD、及び実践的全学FDプログラムの成果を発表し、今後の徳島大学FD活動の課題と展望を検討、討議した。また、授業エキスパート・ワークショップで開発した「徳島大学FD推進ハンドブック」の内容紹介を行った。(H14~15年計288名)

総括

全学FD推進プログラムにこれまで参加した教員の延人数は500名を超えており、全学FD活動として軌道に乗り、徳島大学の授業力、ひいては教育力アップにつながる活動となってきた。しかし、FD応用プログラムやFDシンポジウムへの参加人数に減少傾向が見られることから、次期FD推進プログラムでは、より多くの参加者を獲得すると同時に、FD活動の日常化を視野に入れた取り組みが求められる。以上の点をふまえて、第2期全学FD推進プログラムとして以下のような計画案を策定した。

第2期全学FD推進プログラム(2005/4-2008/3)

基本的な視点:

① Organizational Development の考え方 (Faculty Dev.+Student Dev.+Staff Dev.)

FD活動を、教員のみのもと考えずに職員やTA学生も巻きこんだ徳島大学全体のもので取り組むこととする。

② FDの日常化

開催回数を増やすと共に、参加しやすい状況を設ける。

③ ITを利用したFD情報の配信

FD推進プログラムの内容をホームページに掲載し、学内メールシステムを使って更新

案内や他のFD情報を配信する。

活動を行う。

② 学内のよりよい教育実践例を正しく評価し、ノウハウの共有化を図る。

③ FD推進プログラムへ参加する教員間の連携を強化する。

第2期全学FD推進プログラム

第2期プログラムの目的

① 職員、学生を巻き込んだ実践的な授業改善

	開催プログラム	基礎プログラム対象者授業	個別コンサルテーション
4月		ビデオ撮影*)	担当教官と個別にアポ*)
5月	FDラウンドテーブル		
6月	FD基礎プログラム リーダーワークショップ		
7月			
8月			
9月	FDラウンドテーブル		
10月		ビデオ撮影*)	担当教官と個別にアポ*)
11月	FDラウンドテーブル		
12月			
1月	FDラウンドテーブル		
2月			
3月	教育カンファレンス 『大学教育研究ジャーナル』の発行	*) その他希望者の参加も受け付ける	

①FD基礎プログラム

(対象となる教員を、新任教員全員対象から教育活動歴5年未満の新人に限定する。また、人数枠に余裕がある場合、他にも希望者等を受け付ける。)

対象者：教育活動歴5年未満の新任教員(他に、希望者+学部長推薦者)。

希望者及び、学部長推薦者は前年度の3月31日までに氏名を把握する。

基本となる内容(ティーチング{大教室、ゼミ}、評価、学生との関係など)と4月末のニーズ調査に沿ったWSを組む。

開催時期：6月上旬、淡路青年の家、1泊2日で行実施(リーダーワークショップと並行)

②リーダーワークショップ(Mentor Workshop)

(教務委員、FD専門委員が参加していたワークショップを、10年以上の教育経験を有する教員を

対象とし、他の教員に対してメンターとして接するための訓練の場とする。)

対象者：10年以上の教育経験者で、他の教員に対してメンターとして接することが求められる教員。

または、各学部で学生の評価が高い教員の中から他の教員のメンターとなるにふさわしいとして選ばれた者。

1年目：メンタープログラムの枠組み作成

2年目以降：メンター養成ワークショップ

(FDハンドブックの改訂作業も行う)

開催時期：6月上旬、淡路青年の家、1泊2日で行実施(基礎プログラムと並行)

③個別のコンサルテーション(Consultation)

(FD応用プログラムを改め、基礎プログラムに参加した教員を主な対象者とする授業改善のためのコンサルテーションの機会とする。)

対象者：基礎プログラムに参加した教員、または希望者。

授業参観の機会を提供、もしくはビデオ録画した自身の授業をもとにセンター新規採用の教員が中心となり授業改善のためのコンサルティングを行う（センター新教員の授業担当コマ数を他の教員よりも低く抑えることが望ましい）。対象教員の許可を得た場合、授業研究会となり、他の教員がコンサルテーションに同席することも可とする。

④FD ラウンドテーブル

（リラックスした雰囲気の中で、授業改善に関する情報共有、ディスカッションの機会を設ける。）

対象者：関心がある全教職員・大学院生 TA（2日前までに申込予約が必要）会場設営のため定員あり。

内容は、日常の教育活動全般に関する情報交換、スキルアップ・セミナー、ハンドブック関連トレーニング。

時間：ランチタイム、もしくは、ティータイムを利用して開催（初年度は、年に4回程度開催）

話題提供者：教育賞受賞・教育改善費補助金受領者、高度情報化基盤センター教員、CUE 教員、他

開催予定を Web で発表し、参加者を募集する。後日、内容の要約版をセンターHP に紹介する。

⑤徳島大学「教育カンファレンス」

（大学教育委員会等の組織による徳島大学教育賞に関連した教育改善の取り組みを学内教育カンファレンスで発表する。次年度の教育改善補助金対象者の発表も行う。）（徳島大学教育賞や教育改善補助金制度の制定、要項の学内周知が必要となる。）

内容：教員による教育改善の取り組みを発表、また、教育賞受賞者の発表も行う。

開催時期：3月10～15日頃

日程：9:00 より受付 9:30～12:00 午前の部

& 14:00～16:30 午後の部

当日発表された内容を『大学教育研究ジャーナル』にも掲載する。

⑥『大学教育研究ジャーナル』の継続発行

第3号以降の発行。全学FD実施報告書を兼ねる点も従来と同様とする。

⑦FDハンドブックの改訂

第3号までの内容の改訂・合本などを検討する。

⑧高大接続の具体化

教科ごとの高大連携WGを設置し、カリキュラムの検討を行う。

⑨学生参画型FDの推進支援

大学教育委員会のもとに設置されるWGへの直接的・間接的支援を行う。